



## 『飯館村 — 放射能と帰村』

「補償金、月10万円で生活できますか？」と政府に訴える飯館村の志賀正男さん  
 監督・撮影・編集・製作／土井敏邦 日本映画 2013年 119分  
 ★東京・新宿K'scinemaで公開中 6月15日より大阪第七藝術劇場、以下横浜ニューテアトル、フォーラム福島、名古屋シネマテーク、神戸アートビレッジセンター、広島横川シネマ等全国で順次公開予定 ©DOI Toshikuni

● 坂の多い長崎の町を背景に、2人の若い女性が描かれる。大学生の清水（きよみ）の母親は、ある日自宅で心臓麻痺のため急死する。その日、恋人とデートしていた清水は、母からの電話に出なかつた自分に責任があると感じて苦しむ。一方、1年前に4歳の娘を急病で死なせた沙織は、病気の原因は自分が被爆2世だからではないかと疑っている。医師に妊娠を告げられても、再び子供を失うことを恐れて、産む決心がつかない。

● 大抵の人は、肉親であれ他人であれ（あるいは、飼っているペットであれ）自分の周囲に代え難い存在を持つている。ある日突然それが奪われたとき、人の心は極度の喪失感から、一種の麻痺状態におちいる。沙織の場合は、死んだ娘がよく手にしていた小さな宝貝が目前に見える幻視現象が起こる。清水は、東京の大病院で医師になることをめざす恋人と心が通じ合わなくなり、バイク店で働く自閉的な青年に近しい感情を抱くようになる。映画は、彼女たちの受けた傷の深さ、心の微妙な変化を追う中で、沙織の両親が語ろうとしない原爆体験とどこかで重なり合う心情の流れがそこにあることを示している。

● 極度の喪失感といえは、2年前の東日本震災と福島原発禍の体験者たちの心情にも当然共通点があると言えよう。土井敏邦『飯館村 — 放射能と帰村』は、福島第一原発から30キロ、大量の放射能を浴びて全村避難を命じられた飯館村住民の肉声を集めたドキュメン

タリーである。事故で親子が一緒に暮らせなくなった二つの酪農家族が出て来る。生まれ育った故郷の家や畑、家族同然に育て上げ生活の柱でもあった牛や豚を、ある日突然奪われることの理不尽が、彼らの上にのしかかっている。「村から避難しろ、村に戻れ、ああしろ、こうしろと余計なお節介はしないでくれ。村に戻るかどうかは自分で決める」というのが、行政に対する彼らの声だ。

● 幼い子どもを持つ母親たちは、2ヵ月近くも線量の高い村に残ったことが、結婚や就職など子どもたちの将来に与える影響を心配する。これから産まれる子どもたちの健康への、数字では測れない不安もある。

● 政府は避難区域を見直し、除染により放射能が年間20ミリシーベルト以下に抑えられた地域を帰村可能とした。村がゼネコンに発注した除染費用は3千億円に上るといふ。新たな原子力神話ともいふべき「除染神話」を信用する村民は少ない。「仮に家に帰ったとしても、前のような酪農や農作業ができないのなら、何が村の復興だ」「事故は終わった、除染と事故は別だ」という考え方。その元は経済界だ。事故を縮小化して、また原発を早く稼働させようとして、そこに落ちていくんだらう。

● 上辺を塗り替えただけの経済成長への空疎な掛け声と、かけがえのないものを喪失した人びとの実感に満ちた叫びと、どちらに耳を傾けるかに、私たちの将来はかかっている。

本野義雄（もとの・よしお／本誌編集委員）